

公園をみる・観る

= まつりの後の赤トンボ =

今夏、公園とその周辺には平年がない特別のことがおこっていた。

長かった梅雨に加え、梅雨明け以降の連日の猛暑。山口県では例年7月20日前後には梅雨明け宣言が発表されるが、今年は台風9号、11号の影響もあって、他地方に遅れること約1週間、7月の末になって全国で^{しんがり}殿の梅雨明けとなった。梅雨明けすると今度は連日35度超えの猛暑の到来。立秋間近の8月7日には何と37度を超え、生き物全ての生気を奪い去るかのような気象に悩まされる毎日だった。

そしてこの暑さの中、7月29日からきらら浜で「世界スカウトジャンボリー」。約150の国と地域から3万4000人の若者が集まって大イベントが開催され、公園にも外国人の姿が普通にみ



られた。観察ホールに特設されたふれあい水槽の中のトビハゼやカブトガニと戯れながら、ひと時の涼を取る彼らを見ていると、公園で見かける鳥たちの姿と重なる気がした。金髪、青い目、黒い肌……日本人にない色彩や姿態を持った彼らから人も細部化されたとはいえ、太古から生命の全てを掌握し支配するDNAの根幹はどの生き物も大差ないと実感できた気がする。その世界スカウトジャンボリーの開会式に出席された皇太子の休憩所として公園事務所が大役を務めたのも、公園史上、特筆すべきことでもあった。

世界スカウトジャンボリーに合わせて行われた「やまぐちジャンボリーフェスタ」も、14年前のきらら万博以来の人出で賑わっていた。しかし、人間がどんなに酷暑にうしろすが、まつりに浮かれようが、自然は黙々と自らの営みをすすめている。ふと、気がつくと赤トンボが園路に舞い、ハゼの葉が赤く色づき、空には入道雲に加えスジ雲が姿を見せ始めている。 (土×土)



～ ジャンボリー開催に思う ～

「世界スカウトジャンボリー」が閉幕した。約150の国と地域から3万4000人の人が阿知須きらら浜に集まり、期間中はさながら外国の町に紛れ込んだような有様だった。公園にも多くの外国人が来館し、環境を楽しみ、涼を取って行った。一般的に規律を守った行動をとる人が多い中で、どこの国にも一部の不屈者はいるようで、東屋のベンチを淡水池に投げ込んだり、展望棟に落書きをしたり、紛失物があったりと多少の被害がでているとのこと。しかしそうした可愛い(?)悪戯は良しとしても、もっとも心配なのはジャンボリー開催の前と後の環境への影響である。

ジャンボリー開催1年くらい前から日ごとに変わりゆく干拓地の様子を眺めていた。終了した今、グラウンド状に均された干拓地を見て、渡り鳥たちにどんな影響を与えるのか……、干拓地に住み着いていた生き物たちはどうなったのか……さまざまな不安がよぎる。

干拓地を造り、長い年月をかけて育てた自然、その自然をこのたび踏みにじる形で世界の若者の交歓会が行われた。払った犠牲に見合う成果をいつかみせてほしい。